

〈人間 = 記号〉論について

西 勝 忠 男

The word or sign which man uses *is* the man himself.
My language is the sum total of myself.

— Charles S. Peirce —

目 次

はじめに

1. 三つのテーゼ
2. 記号としての人間
3. 人間のアイデンティティ
4. 推論過程としての〈人間 = 記号〉論
5. 人間の本質：コンシステンシー
6. ことばと人間：その重層的構造
7. “ファラビリズム”へ

は じ め に

パース(1839—1914)はデカルト哲学を、したがって近代哲学全般を、批判した論文「四つの無能から生じる諸帰結」^(注1)の最終部に、シェイクスピアの次のことばを、それと言及することなしに、掲げている。

……ところが人間は、

傲慢な人間は、東の間の権威をかさに着て、

自分がガラスのようにもろいものであるという

たしかな事実も悟らず、……^(注2)

パースによる現代記号論のはしりとも言うべきこの論文が、その締めくくりにおいて、突如、このような含蓄ある人間観を垣間見させることばをもって、まさにドラマティックに、ぷつぷつと終っている。「問題劇」とされて、苦渋の

色さえ見えるこのコメディの、しかもこのような仕方での引用は、私の心になんとも微妙な一石を投じたのである。

パースのこの論文には、確かに、このような台詞が登場するための前置きもなければ、これについての説明もない。ここに至るまでは、哲学・論理学の厳密な文脈での煮詰めがすすめられてきているのであって、このような劇的文言に出合うことは、あたかもミネルバの森に突如躍り出たミューズが、その華やかな姿を瞬時にして隠すかのごとき感がある。つまり、パースは「ロゴス」を語りながらも、「ミュートス」を挿入しているのであって、これによって、人間存在の深みを窺わせようとしているのかもしれない。それゆえ、この引用を単なる比喩や文彩として見すごすことは、不十分な理解ということにならざるをえないだろう。のみならず、この文言に込められている思想は、人生経験についてはいまだ豊かならざる青年パースではあるにせよ、その抱懐する〈人間 = 記号〉“the man-sign” (C.P.V. 313) 論を考察するうえで、きわめて象徴的で重要なものではないかと思われるのである。

彼が述べている哲学・論理的な、いわば大局的、抽象的な〈人間 = 記号〉論の基底には、どろどろとした人間存在のリアリティがある。そして、愚かにも愛すべき人間は、記号として、そこに横たわっているのである。彼はそれに目を向けながらも、それについて述べることはしていない。若かりしパースには手に余るような人間存在そのものの記号性、ということではなかったろうか。パースの記号論をまともに捉えようとするかぎり、人間論的視角を除いてありえないと思われる。

記号としての人間の諸相を描き出そうとすることはさておき、論理学者としてのパースは、人間が社会的存在であるという、この明白な事実を、正当にも痛切に感じとっていた (C.P.V. 311)。人間が社会的存在であるからこそ、そこになんらかの記号性がついてまわるのである。言い換えれば、「人間」が「記号」であるということは、とどの詰まり、人間が社会的存在だということなのである。

人間の社会性ということは、つとに主張されるところではあるが、それをど

う捉えるかに問題がある。以下に論じるように、パースは人間の記号性ということ、人間の社会性の別称として捉えていた、ということができよう。上掲の引用に対するパースの意図も、実は、その所属するコミュニティとのつながりを喪失して、孤立した、リアリティなき人間の姿に言及しようとするものなのである。パースにおいて記号論はまた、社会的人間論でもあるのである。それゆえ、人間記号論を展開するためには〈人間，記号，社会〉なる三項関係が前提となっていることに注意しなければならない。

(注 1) Some Consequences of Four Incapacities, *Journal of Speculative Philosophy*, vol. 2, pp. 140—157. (1868).

この論文は『パース論文集』*Collected Papers of Charles Sanders Peirce* (vol. I—VI ed. by C. Hartshorne & P. Weiss, 1931—35. vol. VII & VIII ed. by A. W. Burks, 1958. The Belknap Press of Harvard University Press) の第 V 巻 264—317 節 (pp. 156—189) に収録されている。以下、小稿での引用は (C. P. V. 264) のように略記する。

(注 2) この台詞は『尺には尺を』からの引用であるが、パースの文章では次のようになっている。

“ … proud man,
Most ignorant of what he's most assured,
His glassy essence.”

しかし、“*Measure For Measure*” のテキスト (Act II. sc. II. 117—120) では

“ … but man, proud man,
Drest in a little brief authority,
Most ignorant of what he's most assured,
His glassy essence, … ”

とあって、1行抜けているのであるが、ここでは敢えて詮索せず、テキストどおりの訳文 (小田島雄志訳) をあげておいた。この「もろき人間の本质」“man's glassy essence” なることばは、パースの好みのことばとみえて、後の1982年の『モニスト』*The Monist* 誌上では、このことばを表題にして、科学哲学の論説が展開されている。

なおパースは、すでに1864年に「シェイクスピアふうの発音」(Shakespearian Pronunciation) なる言語学の研究論文を『北米評論』*North American Review* 98, pp. 342—69. に掲載していることを付言しておく。

1. 三つのテーゼ

本稿では、まず、筆者の考える「人間記号論」の着想を、テーゼとして述べるとともに、若干敷衍して説明する。次に、それに対するパースの〈人間 = 記号〉論による裏付けを求めながら、そこではなにが言われているかをチェックする。これによって人間記号論の基礎づけを模索する、というかたちで論旨を展開していきたい。したがってここでは、そもそも「記号」とは何か、というより基本的な事柄については触れられていない。

さて、人間記号論の構想を展開するために、互いに関連し合う次の三つのテーゼを提起しておきたい。

(1) 人間は記号である。しかも、人間とは、記号として捉えられることが最も適切な取扱いとなるような存在でもある。人間以外の動物には己れが記号だと意識するようなことは、まずありえないであろう。しかし人間にとって、自己を含むあらゆる人間は記号としてあらわれるし、記号として意識しうる。しかるに人間は、このことを自覚することが少ない。そこに、自覚しうるにもかかわらず自覚しえない、囚われの人間のかなしさがある。つまり、これは人間のアイデンティティの問題だといえる。第二に、

(2) 記号であるところの人間の記号性は、人間には読み取れないことが多い。この記号性の解釈は暗号解釈の一種とみなすことができる。このことはまた、人間は人間にとって最も興味ある記号であるとはいえ、単に記号としての捉え方には限界があるということでもある。つまり人間は、単なる記号として扱われることを拒否するし、たえず記号たることを超えていこうとする存在だからである。ここに、人間存在における“意味”の問題が生起する。しかし、解釈ということからすれば、この第二点はアブダクション *abduction* の方法、つまり、発見の論理と密接な関連をもっている。そして、第三に、

(3) たとい人間は、この記号性を読み取ることができたとしても、これに対する十分適切な対応ないし解決をなしえないことが多い。ここにファラビリズム *fallibilism*、すなわち可謬主義というべき、人間存在の根底に係わる思想

発生源がある。しかし、ともあれ人間が、ことばを用いてことに当たる存在である以上、人間の現実とことばとの間には完全な対応関係は成り立たないといえる。それゆえにかえって、この問題はレトリックにつながるものと見ることが出来る。

さて、こうして人間を、記号として考察しようとする、その自覚においても、解説においても、また、対応においても、すべてネガティブなかたちでしか述べえないことに注意しよう。人間は自己以外のすべてを記号と見なして、つまり、そこに立ち現われたものすべてを読み取って、かなり適切な仕方で処理することができる。しかるに、自己を含めた人間そのものは、人間以外の記号と同じようには扱えないということである。それは、人間というものが、既に他人との関係にある“個人”としての、社会的な存在だから、ということである。しかも、この社会的存在ということは、孤立した“個体”としての人間でない、連続的な存在ということであり、そのような連続体の中でのみ、適切に解説されるものだということなのである。

2. 記号としての人間

記号としてあらわれている自己を捉えるということは、自分の経験を正しくつかもうとすること、言い換えれば、真の自己を取り戻そうと努力することだといえる。自己以外のものについては何であれ、記号として客観的に捉えることができるにもかかわらず、自己そのものを客観視して、記号として捉えることにはたいへんな困難がある。自分がいま何を感じ、自分にいま何が起きているか、それを知ることは容易でない。にもかかわらず、人間にとって自分の経験を正しく捉えることはなによりも重要な課題である。その意味において、ソクラテスの名にむすびつけて語られている「汝みずからを知れ」の示唆は、記号としての人間に対する重大な警告であり、要請であるといえる。

人間は考えること、さらに、みずからを反省することによって、自分がいま何を感じていたかを意識できるのである。このことは、たとえば、人間以外の生き物が、海や山の輝かしい、または荒涼とした風景に接して、どれほどの感

懐をおぼえることか、それはわからないけれども、少なくともそのものに、その風景を感じ取る心のゆとりがなければなるまい。それに加えて、かれらが抱いている感動があるとしても、それを表現する手立てはきわめて乏しいのである。すなわち、叫ぶなり身ぶりなりによって示すしか仕方はあるまい。その仕方はいくつかのきわめて限定された枠組をもつものではなかろうか。そもそも、人間以外の動物に感動というような、かなり高度な精神活動を想定すること自体おかしいかもしれないが。

しかし人間は、その感動をことばによってかなり自由に表現することができる。風景が風景としてその人間に立ちあらわれる限りにおいて、感動を導くもの、つまり、価値あるものだとすれば、それは人間と風景とが接すること、言い換えれば、人間が風景と出会う、ということがなければなるまい。そのような出会いの場がトポスとよばれるものであろう。このトポスの中には、記号論を構成する要素がすべて含まれているということができし、トポスそのものは自身の分析を要求するのである。まず、風景という記号が意識させる人間感情が存在する。パースに引き寄せていえば、このような感情なるものは、「第一次性」(C.P.I. 306)というカテゴリーに属するものとされる。人間記号論の立場からすれば、記号とは、まずもって人間感情を触発するものなのである。

さて、このような感情はまだ漠としたもので、いわば未分化の存在であるが、この漠たるものが、ことばという媒体を通して、カテゴライズされはじめるといふやいなや、次第に明確な形をとるようになる。実に、ことばのはたらきは人間の心の中に生じた何ものかをカテゴライズして、規定することにある。漠たる感情といえども、ことばによって規定されえないものではない。言い換えればむしろ、感情に明確な形を与えてくれるものがことばなのである。

美しい風景に対する感動ということから人間感情の記号性ということを考えてみたのであるが、人間記号論としては、当然、人間のアイデンティティが問われなければなるまい。それは、社会的存在としての人間の記号性ということである。

3. 人間のアイデンティティ

人間はすべて生まれ落ちたときから、既にさまざまな人間関係のなかで生きている。親子、兄弟姉妹からはじまって、友人、師弟、先輩後輩、知人、敵味方、上司部下、恋人、夫婦などなど。そのように多元的な関係の中で、実にさまざまな感情に出くわすことになる。ひとくちに喜怒哀楽といわれるが、口舌に尽くしがたい微妙なものから、愛、嫉妬、憎悪など、まことに度しがたい強烈な感情にいたるまで、折りあらば見舞われるのが人間の生である。これを、記号としての人間という立場からみれば、いかに多様な人間の姿が浮かびあがってくることであろうか。

そして人間は、その感情を原動力として、さまざまなかたちの行動にあらわす。たとえば、一見不可解な行動であっても、その人間がどんな感情を抱いているかがわかれば、即座にその行動が納得されるというものであろう。それゆえ、行動のもつ意味は、その行動を生みだした感情へと溯りうるときに把握されるのである。

パースの現象学的カテゴリーのことばで言えば、感情というような第一次性 Firstness の記号のもつ意味（第三次性 Thirdness）は、第二次性 Secondness である行動という記号が理解できるときに、すなわち、行動のもとをなす感情を突き止めえたときに、了解されるということになる。言い換えると、感情や感覚など、内なるものとしての第一次性は、外へのあらわれとしての物や出来事、さらに行動、というかたちで表出される。これが第二次性であって、外へのはたらきかけとなる。ここでは、漠たるつかみどころのなかった感情は、その性質によって分類されたり、その効果が計られたりする。つまり、限定という過程を経るのである。その結果、第三次性としての意味が了解され、ある種の想念が得られる。このような意味や想念は記号を通して〈作られたもの〉である。そして、このような観念形成過程は記号形成過程とよばれて然るべきであろう。

こうして人間の感情、行動、そして想念は、この一連の過程をとおしてたえず動いているものである。人間はそのような動きの中で、一応の了解をしなが

ら、人間存在についてさまざまな発見をし、人間を、そして人生を、みる眼が養われていくのである。〈生けるしるし〉とはこのような発見のよろこびではあるまいか。

ところで、このような“記号としての人間”の、全体としての原動力は何であろうか。それは先きほども述べたように、人間が既にコミュニティの中での諸関係として存在しているものだということ、つまり、そのような関係的存在だということが、さまざまな姿をとって生きている人間の原動力だ、ということなのである。人間のもつこのような関係やそのあらわれである姿が、記号として示されるのである。言い換えれば、人間なるものを同定するとは、そのような関係において捉えることなのである。しかもその記号性が、人間と人間との多面的で可変的な関係である以上、捉えそこなうことが多いのである。いや、人間の生はいつも、対 = 人間関係なればこそ、捉えそこねている生きものではないのだろうか。この対 = 人間関係の中で新たな意味が発見されるよろこびは大きい。しかし、その意味を、その記号性を、捉えそこなうときの心残りもまた大きいものである。

いったい、他者の了解ということとは、どこまでなしうるものであろうか。相手の心の底まで明白にわかる、そのしぐさ、表情、そしてなによりも、表白されることばによって、どこまでわかることができるのであろうか。しかしその問いはまた、ひるがえして自分に向けてみるがよい。いったい幼時よりこのかた、たとえ一人でもよい、自分が他人によって、どれだけわかってもらえた、と言いうるのかと。そうしてみれば、人間は互いにどこまで係わり合い、わかり合えるのか、まことに心もとない、という思いに打ち沈むこともあるだろう。しかしそれは、ほどほどでよいのかもしれない。人と人との交情がいかにもむずかしいものであるかを知りながら、しかも心の交流に思いを尽くす、ということであろう。

記号としての他者を捉えそこなうということは、ひっきょう人間が、価値をはじめ、あらゆる方面において、実に多元的なあらわれ方をしているがためである。人間のこの多元的なあらわれを称して「記号人間」とすることができよ

う。ともあれ、人間を記号の集合体とみることは、人間の本性を捉える方便の一つにすぎないものであるにせよ、まずもって、人間にはさまざまな面があり、一元的でリニアな仕方では決して捉えられるものでないこと、このことを思い知らせるべく痛棒をくらわす、ぐらいの効果はあるといえるであろう。

4. 推論過程としての〈人間 = 記号〉論

パースの〈人間 = 記号〉論は、人間の精神を推論として捉え、すべての思考を記号形成過程として展開しているのだから、これを、記号としての人間という視点から見る「人間記号論」としては、必ずしも明快な論証になっていない。そこで、パースの論証を、もう少しわかりやすい形に整理しながら、人間記号論としての肉付けをしてみたいと思う。

そのためには、まず、パースにとって「記号論」“semiotic” (σημειωτική) とは広義の「論理学」にほかならないこと (C.P.II.227)、したがって、記号論においても、他の、知の営みと同様に、推理という人間の日常経験における営みを土台とするものだ、ということを確認しておかねばならない。

さて、冒頭に挙げた〈人間 = 記号〉論の提唱論文「四つの無能から生じる諸帰結」においてパースは、デカルト哲学における次の四つの根本的主張をすべて否定することから始めている (C.P.V.264)。すなわち、

- (1) 普遍的懐疑 (universal doubt)
- (2) 確実性の究極的テストとしての個人意識 (the ultimate test of certainty is to be found in the individual consciousness)
- (3) リニアな推論 (a single thread of inference), 及び
- (4) 「神の御業」というほかに説明せぬのみか、絶対に説明不能とされる事実を存在させること (there are many facts which Cartesianism not only does not explain but renders absolutely inexplicable, unless to say that “God makes them so”)

である。つまり、これらに対する批判的反論がパース哲学を形成するとともに、〈人間 = 記号〉論の基礎づけともなるものなのである。

すなわち、まず、「普遍的懐疑」なる建て前に対しては、われわれは現にもっているあらゆる偏見から出発せざるをえないのであって、疑っているかのような、哲学的素振りをするのはやめるように提案される。次いで、個人の確信を真理の裁判官たらしめることはきわめて有害なことであって、真理は哲学者の形成するコミュニティにおいてこそ求めうるものだ、との見解が打ち出される。そして第三に、哲学は、その方法を、成功ずみの科学に見習うべきであって、具体的な前提から出発して、多様な論証をより合わせた太綱のごとき推論にしなければならぬと主張される。そして最後に、究極的存在を想定しても、それが果たして、説明不能な絶対的なものかどうかは、記号を用いる推理によってしかわかりえないのだから、いわば無条件に、そのような想定をすることは許されることではない、と否定されるのである。(C.P.V.265)

ところで、パースの主張する「太綱」のごとき推論は、どのようなかたちで展開されるのであろうか。これを人間記号論へと導くように構成しながら、しばらく追究してみることにしよう。

パースは〈人間 = 記号〉論を構想するうえで、たとい彼自身はそう述べていないにせよ、いくつかのキー・ワードを前提している、とみてよいであろう。もちろん、ここで言われるキー・ワードの選択は筆者の解釈にしたがうものであるが、それらは結局、パース哲学の根幹をなす包括的概念である。それらは論理的側面における「連続主義」のテーゼと、認識論的側面における「フェラビリズム」のテーゼとして述べることができる。そこで問題は、これら両概念が〈人間 = 記号〉論をいかに支え、また、その展開をいかに扶けるか、ということになる。まず、「連続主義」なるテーゼから考察しよう。

5. 人間の本質：コンシステンシー

人間は連続体 (continuum) であり、その本質はコンシステンシー (consistency) ——無矛盾性——にある。

人間が連続体だということは、人間がことばを用いる存在であることを裏書きするものである。人間存在はことばによって代置される。つまり、その人の

ことばはその人だ，と取られているのである。そして，ことばはことばを呼び，一つのことばは次のことばによって取り込まれ，次々に展開されていく。つまり，より豊かなことばによって，「人間」には，より明確な形が与えられ，人間のさまざまな面は，ことばの展開につれ開示されていくのである。

このような〈人間 = 記号〉とことば (word) との相互関係を，パーズは次のように述べている。「人間 = 記号は情報を習得して，より多くのものを意味するようになっていく。……人間とことばとは互いに教育し合うものである。人間のもつ情報量がふえれば，それに対応することばのもつ情報量もふえるし，ことばの情報量がふえれば，人間の情報量もふえていくことになる。」(C.P.V. 313) このことは，ことばが人間を開示するための最も重要な手立てだということ，情報という量的，可視的なかたちで述べようとしたものにほかならない。

しかしながら，人間は意識を有しているが，ことばには意識はない。意識とはまず感情 (emotion) のことであるが，これが人間 = 記号の素材 (material quality) をなすのだといわれる (ibid.)。そして，意識のはたらきは，自我の作用としての「われ思う」や思考の統一，すなわち，コンシステンシーとしてあらわれるのであって，「あらゆる記号は，それが記号であるかぎり，コンシステンシーを示すものだ」とされる (ibid.)。かくして，「あらゆる思考は記号だ，ということ，人生は一連の思考だ，ということとを結びつけることによって，人間は記号だ，ということが証明される」(C.P.V. 314) として，〈人間 = 記号〉論は，ともかくも，一筋の推論によって示されることになる。そして，「私の用いる言語は私自身の総和なのだ」(ibid.) という，かの箴言ふうのことばが述べられるのである。

人間の有する意識はしかし，意志と混同されてはならない。意志は身体を左右する非理性的な力であって，このような力は思考の道具にすぎず，人間の本質をなすものではないとされる。それでは，人間の本質をなすものは何であるのか。パーズは言う。「人間の本質をなすものは言動における矛盾なきこと consistency であって，このコンシステンシーこそ，ものごとを知的に捉える

特性，すなわち，事態を表示することなのだ」(C.P.V. 315)と。ここにおいて，パースの〈人間 = 記号〉論が「コンシステンシー」という論理性そのものによって支えられていることがわかる。しかしながら，なぜコンシステンシーが人間の本質をなすといわれるのか，さらに問われねばなるまい。

それは，先きに見たように，「どの記号も，記号である限りは，みなそれぞれにコンシステンシーがあり」(C.P.V. 313)，しかも，「人間は記号だ」(C.P.V. 314)とすれば，「コンシステンシーは人間の本質をなすものだ」と結論することは，たしかに妥当な推理なのである。この推理は，それ自体，きわめて明瞭な証明ではある。しかしながら，とさらに追究はすすめられる。記号にはなぜコンシステンシーがあるとされるのか，と記号そのもののアイデンティティが問われねばならなくなるのである。

このようにして，記号とは何かとの答えを求めざるをえないことに立ち至ったが，パースはこれに対してどのように応じているのか。この点についてのパースの言明は，簡略に過ぎて，彼の独り合点ともいえるほどである。そこで，若干の補足言明を付け加えて述べてみよう。すなわち，記号とは，まずもって，記号たることを自らが表明しているものであるから，そこには最早，虚偽や矛盾などが入り込める余地はないのであって，「記号が記号であることを表明することが，ひとえに，自らのコンシステンシーを表明することになる」(C.P.V. 313)のである。そうしてみると，ここに，記号のアイデンティティを求めることは，そのみに止まらず，同時にまた，記号のコンシステンシーが表明されることになるのだ，ということが了解されるであろう。要は，記号のアイデンティティ，つまり本性を，分析的定義の仕方で求めれば，こうならざるをえない，ということでもあるのである。

さらにまた，表明できぬもの，説明できぬ存在，などというものはありえないのだ，とする「实在論」がパースの基本的立場でもあったこと(C.P.V. 311)を思い起こそう。存在するものはすべて，それ自体の表示であるからこそ，「存在」といえるのである。自らを表示することのない存在は，それ自体が自己矛盾であって，自らの存在を否認することになってしまう。デカルト主義の

ように、究極的とされて、しかも認知不能な事実を想定してみても、そのものが説明不可能だということであれば、まさに、なんの説明にもならない。事実を説明するということは、その事実をなんらかの仕方で表示する、ということだからである。そして、表示は記号によってなされる。かくして、記号を用いてこそ、なんらかの表示が可能となる。すなわち、「記号による推論の正当化こそが事実を説明する」(C.P.V. 265) のであり、「われわれは記号なしに考えることのできる力など有してはいない」(ibid.) のである。

6. ことばと人間：その重層的構造

このようにして、いかなる形においても表示されえないような存在は、そもそも存在とはいえないものだ、とするパースの实在論の立場は、精神と物体、心と物、を峻別するデカルトの二元論的立場が、認知不可能なものを前提せざるをえないことによって、心のはたらきに不当な限定を強い、延いては、不可知論——パース自身はここではそうよんでいないけれども——を招きよせてしまうことを強力に批判する。二元論的思考は、なによりも、世界を分断して、連続主義的思考を排除してしまうという、はなはだ論理的ならざる帰結を伴うものである。それゆえに、人間という、多様にして多面的な、さらにいえば、いくつにも分裂する存在としてのあらわれを取りながらも、なお、連続的な統一体としてしか捉えられぬ存在は、二元論的思考によっては、正しく捉えることのできるものではないのである。

パースはまた、この点に関して、デカルト主義的二元論に連なる唯名論に対しても鋭く批判する。というのも、唯名論も認知不可能で表示なき存在を容認するからであって、「これに対する自分の原則たるべきものは、实在論的、観念論的なものだ」(C.P.V. 310) と提唱するのである。この〈实在論的観念論〉は、世界を人間の心との係わりにおいて考える立場をとることによって、必然的に反 = 二元論的、反 = 不可知論的、反 = 唯名論的な観点を示すものとなる。そして、それゆえに、实在論的観念論は連続主義的で、記号主義的思想を支持するものとなるのである。

〈記号としての人間〉とことばとは、このように連続しながら、コンシステンシーなる原理を通して、重層的にはたつき合っている、と見ることができよう。言い換えれば、コンシステンシーなる原理は、言語記号のみならず、これに対応する人間 = 記号をも貫いてはたらいっているのである。コンシステンシーとは、本来、そのような対応関係に置いてみることによって、初めて捉えることのできる関係なのである。

つまりわれわれには、ある一つの言明群ないしシステムが、それ自身の内部のみでコンシステンシーを満たしているかどうかは、直接に知りえないことがある。そのような場合に、非ユークリッド幾何学に見られるように、そのシステムとうまく対応するような、もう一つ別のシステムを作ってみて、この新しいシステムに矛盾が見いだされないとすれば、もとのシステムにも矛盾がない、と認めてよいことになる。ことばと人間との対応関係も、このようなコンシステンシーに貫かれた重層的な構造を示すものとして、アナロジカルに考察することができるのである。

7. “ファラビリズム”へ

以上によって、コンシステンシーが人間の本質をなすということを、パースの〈人間 = 記号〉論なる観点に立って論証してきた。しかし、現実の人間はむしろ、矛盾に満ちた八方破れの存在なのではあるまいかという疑問は残る。しかし、それはそれでよいのである。というのは、現実の人間は矛盾に満ちた存在、つまり、多元的で、しかも分裂した姿で示されている存在、であるがゆえに、そのアイデンティティが問われたのであるから。しかも、たとい矛盾、撞着に満ちてはいても、そこになお、コンシステンシーがあってこそ人間なのだ、と言いうるのである。

ところで、コンシステンシーが人間の本質だとしても、それがどこまで達成可能であるかということは、残された問題である。つまり、いかなる形にせよ、人間論が考えられるためには、人間存在のアイデンティティが問われるとともに、また、人間のリアリティが示されなければならないであろう。後者の

問題に想いをひそめるとき、われわれは直ちに、人間の誤りやすさということに思っていたのではなからうか。ここに、認識の原理とされているファラビリズムが、殊に人間記号論を志向するわれわれには、パースの言う「痛恨のファラビリズム」“contrite fallibilism”なるものが、考察されねばならないことになる。

Bibliography

- Peirce, C. S., *Collected Papers of C. S. Peirce*, 8 vols. Harvard U. P., 1931—58.
 Peirce, C. S., *Writings of C. S. Peirce*, Vol. I. Indiana U. P., 1982.
 Peirce, C. S. (ed.), *Studies in Logic*, John Benjamins Publishing., 1983.
 Deely, J., *Introducing Semiotic*, Indiana U. P., 1982.
 Greenlee, D., *Peirce's Concept of Sign*, Mouton, 1973.
 Hardwick, C. S., (ed.), *Semiotic and Significs*, Indiana U. P., 1977.
 Ketner, K. L. & Others (ed.), *Proceedings of the C. S. Peirce: Bicentennial International Congress*, Texas Tech Press, 1981.
 Sebeok, T. A. (ed.), *A Perfusion of Signs*, Indiana U. P., 1977.

以上